

「やってみよう！」からやりぬく力へ つながる保育を目指して

～環境と援助の在り方を見つめ直す～



発表者 石倉 みのり・市原 知佳子（米子幼稚園）
指導助言者 福山 寛志（鳥取大学地域学部 講師）
司会者 佐々木 満知子（米子幼稚園）
記録者 岩本 絵里・金山 舞佑子（米子幼稚園）

1. 発表の概要

（1）主題設定の理由

本園では、園内研修の一環として、学期ごとに子どもの育ちを振り返る場を設けているが、振り返りの中で浮かび上がってくる課題の中でも、近年の気になる傾向として、苦手なことや困難な場面に直面すると、やろうとせず避けたり、すぐに物事をあきらめたりする子どもが増えてきた、といった課題が毎回のようにならざるようになってきた。そこで、令和5年度から、非認知的能力の柱になる力の一つと言われている、『やりぬく力』に注目して研究に取り組むことにした。

まずは子どもたちの「やってみよう！」という気持ちを引き出し、創園の精神である『遊戯三昧』の言葉にあるように、夢中になって遊び込む中で、やり抜く力を育んでいくために必要なことは何か。日頃の実践事例をもとに、環境や援助の在り方を見つめ直しながら、研究を進めてきた。

（2）研究の取り組みについて

- ① 各学年ごとに、テーマに添った今年度の重点目標を決める
- ② 各クラス・各学年で実践
- ③ 記録を残す
 1. 個人記録（共通の様式）
 2. ドキュメンテーションによる記録（共通の様式での資料作成）

育ちがよくわかる場面を捉え、各クラスそれぞれのタイミングで作成
 3. ドキュメンテーションの共有
 - ・各クラスごとに廊下に遊びの経過を貼り出し、いつでも・誰でも確認できるようにする
 - ・園内研修に持ち寄り報告
- ④ 園内研修（随時開催）

事例報告、検証、課題や悩みの共有

（3）実践事例（年長児）

事例1「総合遊具にチャレンジ」

本園の遊戯室に登り綱・登り綱・吊り輪で構成された総合遊具がある。ねらいを立てて取り組む中で、身体の育ちだけでなく、心の育ちにも大きな影響があり、使い方を工夫することで2歳児からでも遊べ、次年度へ繋げていくことができる。総合遊具に取り組むことで夢中になって取り組む楽しさを味わうとともに、園児の課題を克服し、やりぬく力を育めるようにした。また、子どもの育ちに必要な経験ができる総合遊具を十分に活用しているとは言えない状況があり、園全体でも活用の見直しを行った。



総合遊具の取り組みを通して、保育者と頑張れた喜びを共有したり、諦めずに取り組んだことを褒められたりすること、また、友だちの姿に影響を受けたりすることで、まずは「やってみる」という気持ちが持てるようにしていった。そして、友だちと比べるのではなく、前回の自分と比べて成長していることを側でサポートしている保育者が客観的・具体的に伝え、成長の喜びを共有し、時には友だちと勝負することで、また様々な学年の友だちと頑張りを認め励まし合いながら取り組むことで自信に繋がった。この活動で、『諦めない力』『頑張りを認め合うこと』『まずはやってみようとする』『向上心』などの力が育っていった。

事例2「色水遊び」

子ども達が興味を持った色水作りを、友だちや保育者と一緒に1年をかけて試しながら楽しんでいった。すりこぎとすり鉢を取り入れることで、様々な草花や実をすりつぶすことに興味を持ち、友だちと試行錯誤しながらじつくりと遊ぶ姿が見られるようになった。遊びの中で、興味を持って意欲的に色水を作る中で、友だちの姿に刺激を受け、欲求や向上心が高まる姿が見られた。そして友だちと協力し合い、目標を持って作り上げる楽しさや嬉しさを味わうことができた。



この遊びを通して、夢中になって遊びに取り組むためには、子ども達の“作ってみたい”といった思いを受け止め自分たちで遊びを作り出せるようにすること、共感したり認め合ったりする友だちや保育者の存在が大切だと感じた。また、環境と援助の在り方について、子どもの興味・関心を読み取り必要な援助をしていくこと、興味が広がり遊びに参加したくなるような援助の仕方を考え実践していくこと、そして、遊びの中で一人ひとりの成長や課題を見取り、それぞれの子どものに合った援助に繋げていくことが大切だと感じた。

(4) 年長組の実践事例まとめ(1年間の実践を通した気づき)

個々にあった援助を行っていくために、子どもの姿をしっかりと見取り、理解する。
自分なりの目標を持てるような援助をしていく。
友だち同士での励まし合い、認め合いの中でやりぬく力を育むようにする。



このような援助が、興味を持った遊びを試行錯誤しながら取り組み、自分の力を信じて、あきらめずにやり遂げる姿に繋がった。

(5) やりぬく力を育てるためのポイント～環境と援助の在り方について～

- ①知的好奇心を引き出し、遊びへの意欲を高めていけるような環境・援助を考える
- ②計画性をもって遊びに集中・没頭できる場や時間を保障する
- ③人との関わりの中でやりぬく力を育てる

(6) 研究のまとめと今後の課題

①計画的な実践・振り返り・園内研修

研究を通して、子どもの育ちを踏まえた上で実践を行うことが子どものよりよい育ちにつながることを改めて実感した。記録の工夫・計画的な実践や園内研修を行う中で、子どもの育ちを

見取る力をつけていくことも今後の課題の一つである。

②園の良さを再確認し、保育に活かす工夫

今ある環境についても、その良さを共通理解したり、課題がある場合は必要に応じて見直しを行ったりして、子どもたちの実態に合わせて工夫しながら活用していくことが大切である。今後も園内外の環境について見つめ直していきたい。

③振り返りを子どもの育ちにつなげるための取り組みを継続する

子どもたちの育ちをより確かなものにしていくためにも、定期的に振り返りを行う中で、子どもの育ちや課題を明確にし、課題を実践に活かすという流れを、確実に継続し積み重ねていけるように、今後も取り組んでいきたい。

2. 研究討議

（１）発表に対する質疑応答

Q・・・日常の中で園内研修や話し合いの場はどのようにして設けているか

A・・・年度当初に年間計画を立て、その中で子どもの姿やクラスの姿を話し合う場、学期ごとの振り返りの場、各クラスの実践を発表する場を設けている。

Q・・・総合遊具は普段はどうなっているか

A・・・遊戯室にあり、普段は子どもたちが触れないように片づけてある。保育者だけが準備や片付けをするのではなく、自分たちで意欲的にやろうとする気持ちに繋げるためにも、年長児と一緒にマット出しなどを行っている。その際は、危なくないように見守りながら行っている。準備 5 分片付け 5 分くらい。

（２）グループ協議（情報交換）

5 グループに分かれ、以下の 2 つの議題について情報交換を行った。

他園の取り組みについて知ることができ、有意義な機会となった。

議題 1) 子どもの育ちを見取るために、各園でどのような工夫や取り組みをしているか

職員会・園内研修・研究保育の活用、ドキュメンテーションを活用した育ちの見取り

議題 2) 『やりぬく力』を育むことにつながっている各園の遊び・取り組みなど

行事（子どもが主体となって取り組む・長期間みんなで取り組む）

日頃の遊びの中で、やりぬく力を育む（運動遊びなど継続して楽しむ・造形遊びからごっこ遊びへ・栽培から食育へ等、遊びをつなげる・準備から片付けまでやりぬく）

やりたい気持ちを大切に遊びにつなげる工夫をしている

3. 指導助言（全体のまとめ）

非認知能力は世界的にも注目されるようになった。経済学の領域から出てきた言葉であるが、保育と関連の強い言葉で、非常に注目されている。今回はその中でやり抜く力ということに着目した。やり抜く力というのは、世界的には「グリット」という言葉で表現されている。グリットの中には大きく 2 つのサブ概念があり、一つが、興味の一貫性。もう一つが粘り強さ。例えば粘り強さという言葉で言うと、すぐに諦めない、根気強さというイメージを持つかもしれないが、別の側面では、気長に頑張ってみようといった楽観性とも非常に関連が強いと言われている。あるいは責任感、物事に慎重に取り組む姿勢、計画立てて取り組む誠実性とも関連が強いと言われている。ただ、これらはパーソナリティ・一人一人が持っている性格・特性のようなものという指摘がある。「やりぬく力」というのは、それを伸ばす、身に付けるというよりは、子どもたちが自分で決めた目標に向かって納得いくまでやり抜けるような環境をつくることが非常に重要。自分

自身で、環境や目標設定を考えて工夫していける力を育んでいけることだと思う。遊び・活動自体が、その子にとって、意欲が湧くか、粘り強く頑張り、興味を一貫して持ち続けられるのかが大切で、その子にとって興味があるものでないと意味がない。

今回は総合遊具、色水遊びという遊びを取り上げた。遊具を使うにしても、一人一人に合わせて考えていくことが非常に重要。それはいわゆる自己発揮、自分らしさに関わっていく。自分がいきいきと生活していく感覚を感じられるというのがモチベーションに繋がっていく。それが活動を続けていく原動力となっていく。失敗や間違いでやる気がなくなることはよくあるが、失敗自体がその子の成長のチャンスに繋がる。失敗や間違いも楽しめるクラスの雰囲気や声かけの仕方を意識してほしい。遊びの中で自分の思い通りに行かない時に、一緒に考えるきっかけにする。知的好奇心を促すような声かけをすることで、失敗をポジティブに捉えることに繋がっていくのではないと思う。幼児期の子どもにとっては、言葉や理屈で理解させることは難しい。自分の体験として感覚として実感できる関わりが好ましい。とはいえ、失敗ばかりでできないことが続くとモチベーションが下がっていく。ある程度の成功体験や経験を積み重ねていくことが大切。それに関しては、その子に合った段階をスモールステップで考える。必要な環境を提供していくことが成功体験を積み重ねるということだと思う。クラスの雰囲気づくりに加え、友だち同士の関わりも大切だと思う。総合遊具の活動で、お互いに応援したり、尊敬し認め合ったりするような関わりが、モチベーションになっている。逆に、できないな、悔しいな、という思いもポジティブに受け止めることができれば、それも次の活動に繋がっていくのではないか。競争することは、勝ち負けではなく、どうやったら同じようにできるかを教え合い、失敗や上手くいかない状況を一緒に楽しめる関係づくりが良いと思う。保育者も一緒に競争することも子どもたちにとって良い意味付けがされると思う。保育者が本気で楽しむことで子どもたちにも楽しさが伝わる。そういった活動、遊びを楽しめる関係は、お互い信頼関係ができているからこそだと思う。それが子どもたちにとっても良い経験になっている。色水は、子どもたちなりに考えたり、試してみたりする姿があった。保育者からの提案もあったが、のってくれなかったという場面があったが、それも良いと思う。逆に保育者が提案したものを子ども達が無条件に全てを取り込み、その通りにすることは子どもたちの主体的な遊びではない。保育者がいろいろ提案するが、子どもたちにとってそれが響くかどうかは子どもたち次第である。響いたものがあれば、そこから遊びに発展することもある。逆に子どもたちならではの、いろいろな提案で遊びが発展した部分もあると思う。提案していき、それをやるかどうかは子どもたちが選ぶ。子どもたちが言われたことを必ずしもやらないといけなわけではない。安心できる信頼関係があるからこそ、そういったやり取りが生まれる。やりぬく力を付けるためには、それを実践できるような環境を作っていくことが大切。子どもたちにとってその活動はやりたいことなのか？興味があるものなのか？楽しいことなのか？あるいはできるようになったら子どもたちも嬉しいものなのか？をまずは第一に考えて欲しい。活動自体が楽しい、手を動かして体を動かして遊ぶこと自体が楽しい、と思えることが目的・目標である。それとは少し違い、頑張って練習してできるようになって嬉しいことには、目標設定が大事になってくる。いきなり大きな目標で難しいとモチベーションが下がる。スモールステップでまずはこれやってみよう！という提案が必要になってくる。その子にとって魅力的な目標でないとなかなかモチベーションが湧かない。その子にとって少し挑戦になるような、ちょうどいい目標設定を考えていくことが大事。失敗をポジティブに捉えることは、その子にとっての成長、次のステップに繋がっていく実体験となる。子ども同士では、一つの目標があるときに一人でやることも必要だが、一緒に頑張る仲間がいることは、心強い。やりぬく力は個人の力のように考えられがちだが、それが発揮できるような環境が大切だと思う。いろいろな経験を通して、上手くいったことや、乗り越えられなかった悔しい思いなどの経験をしっかりと積むことが幼児期に大切である。

職員間、保育者同士で共通理解していくことも大切。担任の先生だけではなく、遊びの時に関

わる先生達といろいろな視点で子どもを見ることが大切になってくる。保護者は、幼稚園での様子はなかなか見ることができず、様々な行事で、その日の姿や出来上がった作品を見ることになる。しかし、大事なのはプロセスである。米子幼稚園もプロセスを大切にしている。そこまでのプロセスで何を学んでいるか、どのように変わっていくのか、保護者にも共有してほしい。そうすると、何を大事にしているのか、子どもの成長に繋がっているのかも保護者にも分かってもらえる。その手段としていろいろあるが、ドキュメンテーションもその一つ。活動の変化を保護者の方に見てもらう手段としては良いのではないかと思った。また、お互いの考え方や実践をどのように捉えているのか、いろいろな角度から意見を交換できる、このような研修大会・情報を共有する機会が貴重だと思う。このような研修の機会を持ち続けてほしい。そして、先生方自身が粘り強く迷ったり、悩んだりすること自体を楽しんで、そういったモチベーションで幼児教育を頑張してほしい。